

wide kirishin

国学院大学・国際研究フォーラム

「映画の中の宗教文化」という発想

9月、国学院大学学術メディアセンターで国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」が開催された。「宗教」という問題を学校教育で扱うと、「映画」という素材が効力を発揮する。同フォーラムで実行委員長をつとめた、同大学神道文化学部教授の井上順孝氏が論じる。

国学院大学教授
井上 順孝

9月20日に国学院大学学術メディアセンターで「映画の中の宗教文化」というテーマで、国際研究フォーラムが開催された。日本人の研究者の他、アメリカ、フランスから3人の研究者を招いて、1日かけて熱心な討論が交わされた。わたしは司会を務めたのであるが、大学の宗教学関連の講義において、映画を教材として用いるときの目的、方法、問題点などについて、参加者から具体的な考え方や提案がなされて、大変充実した内容であった。

議論の一部を紹介してみよう。日本のアニメの中には外国人研究者にとって、日本の宗教文化の理解のためのいい導入の役割を果たすものがある。映画は教師の側のある見方のおしつけの手段であってはならない。イスラームを扱った映画は、どの国の制作であるかに注意する必要がある。映画が学生に衝撃的な影響をもたらすことへの配慮もなされるべきである。映画はそれ自体「宗教的機能」をもつ場合がある。

このフォーラムを企画する過程で、少なからぬ数の宗教学関連の大学教授が、映画を教材として用いていることもよく分かった。こうした議論によって、宗教文化を学ぶための一つの手段として映画を用いるとき、その奥行きはさういぶん深いということが、参

加者には確認されたと感じる。その成果を広く共有してもらいたいため、フォーラムでなされた議論の内容は、報告書としてまとめたいと考えている。

今回の企画を立てるに至った経緯を少し説明したい。フォーラムのテーマにある二つのキーワード「映画」と「宗教文化」は、たまたまの組み合わせではない。現代日本において「宗教」という問題を学校教育でどう扱えばいいのか、という課題が背後にあった、必然的に結び合わされた

異なる価値観もつ他者 理解する態度養いたい

日本では、宗教系の学校では、宗派的な教育も可能である。だが、公立の学校において宗教を扱うことはなかなか難しいとされている。現状では、宗教の知識教育が精一杯であるとよく言われる。わたしは適切なものであれば、初等・中等教育では、宗教の知識教育でも十分ではないかと思っている。しかし、今の宗教の知識教育は、事実上「受験のための知識教育」であり、なかなか生きた宗教を学ぶためのものにはなっていない。

かといって、公立学校で宗



『映画で学ぶ現代宗教』
弘文堂、1995円

教情操教育を導入することには問題が多い。賛否両論があり、折り合うのはきわめて難しいのである。そうした実情を踏まえて、数年前にわたしが提起したのが、宗教文化教育という発想である。そしてこれをより積極的に推進するため、大学教育において「宗教文化士」という資格を導入できないかと考えるに至った。現在、日本宗教学会と「宗教と社会」学会という二つの学会の委員が中心になって、これを検討している段階である。日本や外国の生きた宗教文化を学び、それによって異なった価値観をもつ他者を理解しようとする態度が養われれば、宗教文化教育は大きな存在意義をもつのではないかと考えている。

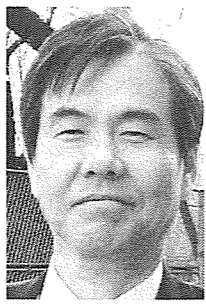
これを推進する上で一つの問題となるのは、ではどのような教材を使用するかである。教材の一つとして、映画は欠かすことはできないことがすぐ分かる。映画には、宗教と民族の関係、宗教の違いがもたらすさまざまな社会問題、宗教によって得られる心の平安、あるいは逆に宗教によって引き起こされる心の葛藤など、きわめて多様なテーマが見出される。意識的に探してみると、ドキュメンタリーはむろんのこと、娯楽映画や恋愛映画などにも、宗教をめぐるテーマが包み込まれているのに気づく。新しい映画には、そのときどきのホットな宗教的テーマが盛り込まれたものがある。

今の大学生は、映画をDVDで見る場合が多い。したがって、副教材として、いくつかの映画を候補として示すと

いうようなやり方が容易である。そうした可能性も考慮して、今年5月に『映画で学ぶ現代宗教』(弘文堂)という本を編集し刊行した。映画の好きな20人の大学教授が執筆している。88の映画について、宗教がどのように扱われているかなどを説明してもらった。その他コラムでも多くの映画に言及がある。

これと連動させる形で、宗教を扱っている映画のデータベースを、現在作成しつつある。数百年のほろが、おそらく今年度中にオンラインで公開できるだろうと考えている。これらは、映画を宗教文化教育の教材として考える教員、あるいは自分なりの宗教への関心に沿って映画を観る学生への情報提供となろう。

9月の研究フォーラムでは、映画を本格的に生きた宗教文化の学びの教材とするには、教師の側もきちんと調べをすることが大切である、という意見が出された。しかし、一人でそれをやるのは、なかなか困難でもある。だが、多くの映画について、教員同士が意見交換できるようなネットワークが形成されれば、それはずっとやりやすいものとなる。そうしたことも宗教文化教育の充実には必要不可欠である。



いのうえ・ぶたか
1948年生。東京大学文学部卒。同大学院博士課程中退。博士(宗教学)。東京大学助手、国学院大学日本文化研究所教授を経て、現在、同神道文化学部教授。著書に『人はなぜ「新宗教」に魅かれるのか?』『近代日本の宗教家101』『神道入門』『現代宗教事典』など。